

医師という人。

天下堂医院

院長

雨宮 明文氏

(プロフィール)

1958年東京都生まれ。北里大学医学部卒業。横浜北中央病院外科、北里大学病院外科、同麻酔科、同救命救急センター、同大学東病院消化器外科、東京都済生会向島病院外科、国立相模原病院外科、同外科医長を経て、03年に天下堂医院の院長に就任。日本外科学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本消化器外科学会認定医、日本乳癌学会認定医、日本医師会認定産業医、日本医師会認定健康スポーツ医。



写真：天下堂医院

子供の頃見た父の姿が 自然と医師の道を歩ませた

「当医院は、私が生まれた年に父が開業しました。9歳になる頃までは、父は自分で麻酔をかけて手術を行い、入院ベッドがあり入院患者さんがいらっしやるという環境でした。幼い頃から、医師という仕事が自分の心身に刷り込まれていたように思います」

雨宮明文氏は、医師という仕事の原体験について語る。父の手術を覗いたり、入院患者さんに食事を運ぶのを手伝ったり……そんな体験を重ねる内、自然と外科医を志すようになっていたという。

「唯一迷ったことといえば、高校生の時。大好きなスポーツの道に進むことも考えました。しかし、長く続けられる仕事、そしてより人のためになる仕事は……と熟考した末、やはり医師の道を選んだのです」

いかに患者さんの立場に立ち、
いかに患者さんの視線で物事が見られるか……



理想的な医院の姿。それは医師と患者が常に密なコミュニケーションを取り合えることかもしれない。雨宮明文氏が院長を務める天下堂医院は、50年に渡り地域の方々の健康管理を担い、信頼関係を築いている。そして近年は、経鼻内視鏡検査を推進することで、患者さんの立場に立った最良の医療を目指している。氏の日々の活動、そして患者さんの健康へ寄せる想いなどを伺った。

実家である天下堂医院を手伝うようになったのは、40歳を過ぎた頃。毎週土曜日に検査などをサポートした。

「父と一緒に患者さんの診療を行っている内に、長く開業医を続けてきた父の偉大さを再認識しました。また当医院には50年に渡り通っておられる患者さんや、そのご家族の方々がいらっしやいます。だから私はよく覚えていなくても、患者さんは昔から私のことを知っているんですね(笑)。そんな風に父が育て上げた天下堂医院を、私が継ぎたいと決心しました」

ちなみに、氏の父で名誉院長の雨宮寛彦氏は今年77歳。今も現役で氏と共に多くの患者さんの診療にあたっている。

患者さんの苦痛を和らげたい…… その時出会った「経鼻内視鏡」

氏は外科医のキャリアをスタートする際、研修の一環として大学病院で麻酔科やICU、救命救急センターなどで仕事をし

ている。それ以外にも、同じ病院の中で整形外科や脳外科、泌尿器科、産科、婦人科などで、たくさん手術を経験した。「手術だけではなく、手術前後の内視鏡検査やレントゲン検査、超音波検査、血管造影検査なども極力自分で行うようにしていました。その意味では、勤務医時代は身体的にも精神的にもかなりハードでしたね。でも、仕事を“苦勞”だと思ったことは一度もありません。患者さんの病気がよくなり、退院する時の笑顔を見ることが何よりも嬉しかったのです。これが一番の心の支えであり、すべての患者さんに思い出があります」

現在、氏は鼻から内視鏡を挿入する「経鼻内視鏡検査」の第一人者としても知られている。

「私は勤務医時代も含めて、従来の経口内視鏡検査を1万例以上経験してきました。また検査を受ける側としても6回程体験しています。その経験上、検査時に患者さんが苦しようにする姿をたくさん見えていますし、私自身も同じ苦しみを味わったものです。そこで何とか苦痛なく検査する方法はないものか……と考えていた時、経鼻内視鏡と出会ったのです」

きっかけは、大学時代の先輩医師。「一緒に新しい内視鏡の説明を聞きに行こう」と誘われたのだ。

「経鼻内視鏡の大きなポイントは、鼻からの挿入をスムーズにするために行う前処置です。そこで何度も、自分で自分の鼻腔内に麻酔をし、モニターを見ながら自分の胃まで経鼻内視鏡を挿入しました。すると非常に楽に挿入出来るのですね。“これはいける！”と思いました」

経鼻内視鏡の数々のメリット 口コミで増え続ける検査依頼

天下堂医院では2004年から積極的に経鼻内視鏡検査を導入。現在は内視鏡検査は基本的にすべて経鼻内視鏡で行っている。

「予想通り、患者さんの反応は“楽だ”と好評でした。経鼻内視鏡導入後、すぐにホームページで紹介したのですが、それを見て遠くに住む方からの問い合わせも少なくなかったですね。また一度経鼻内視鏡検査を受けると、家族や友人にも紹介をしてくださる。そんな風に、口コミで経鼻内視鏡検査を受けに来られる方は増えています」

それは患者さんだけとは限らない。噂を聞いた氏の医師仲間も次々とやって来て、経鼻内視鏡検査を体験。その結果、同内視鏡の導入に踏み切った医師も数多いという。さらには新聞や雑誌などの取材依頼まであり、ついには専門書『消化器医のための経鼻内視鏡検査入門』を出版するに至った。

「様々な形で啓蒙活動を行っている理由は、やはり経鼻内視鏡検査は患者さんに優しく、患者さんのためになるからです。例えば人間ドッグなどで精密検査の必要ありと診断されても、“内視鏡は苦しいから嫌だ”と拒絶する方がいらっしゃいます。しかし、経鼻内視鏡ならば楽に検査が行えます。その結果、早期癌が発見されたとしたら、これほど患者さんのためになることはないでしょう」

実際、経鼻内視鏡の存在を知って氏のもとで検査を受け、早期癌が発見された患者さんは何人もいます。受けなかった場合と受けた場合のことを考えると、これは生死の分かれ目といっても大袈裟ではない気がする。

もうひとつ、経鼻内視鏡には「検査中のコミュニケーション」という特徴もある。

「口からの挿入では患者さんが話すことが出来ませんが、鼻から



ですと自由に話せます。だから患者さんは施行医と共にモニターを見ながら、疑問があればどんどん質問が出来るのです。つまり医師はモニターで実況中継をしながら、患者さんと密なコミュニケーションを取るわけですね。検査時に話すことが出来るということは、大きな安心感につながるはずですよ」

以前は経口内視鏡の経験者が検査を受けに来るケースが目立っていたが、最近は「内視鏡検査をやったことはないが、経鼻内視鏡ならば検査してみよう」という人が増えてきているという。そして、経口内視鏡と比べてその他のメリットについても強調する。

「経口内視鏡の場合は、食道から先の検査しか行えません。これに対して、経鼻内視鏡では鼻腔、咽頭、喉頭もじっくりと観察出来ます。この観察範囲の広さも非常に大きいと考えています」

画質が著しく向上した 新機種『Justia』

氏は最近、経鼻内視鏡の新機種『Justia（ジャスティア）』を導入した。その決め手となったポイントは、画質だった。「ひと目で解像度が優れていることがわかりました。子供が見てもわかるぐらいの違いがあります。特に遠景まで明るく見えるようになったところが大きいですね。また前の機種ではフリーズした時の画面のピンボケがあったのですが、これがなくなりました。すなわち手ブレ防止機能がついたような感覚です」

他にも、レンズが汚れにくくなったことも大きいようだ。「対物レンズが汚れにくくなっていますね。これまでは送水や吸引を何回も繰り返していたのですが、これが改善されました。例え汚れたとしても、すぐにきれいになるのも嬉しいですね」

このような機能改善は、検査時間の短縮につながる。それはすなわち、よりストレスの少ない検査の実践であることはいうまでもない。

では、今後の経鼻内視鏡の進化についてはどのようにお考えだろうか？

「施行医からの注文としては、あと0.1～0.2mmでも細くなれば、さらに検査が楽になります。そのような細径化、また処置具などの機器・器材が進歩していくことでさらに経鼻内視鏡は

普及していくことでしょう。さらには前処置の画一化、介助者である看護師や内視鏡技師たちの教育もより重要になると思っています」

40代、50代以上の人は 年1回の内視鏡検査を

医師として強い影響を受けた存在として、このようなエピソードを教えてください。

「今から6、7年前の話です。私を外科医として育ててくれたかつての上司で、現在は某国立病院の院長をしておられる先生がいます。この先生に早期胃癌が見つかりました。発見者は国立病院の若い医師たち。実は、先生は内視鏡検査の指導をしておられ、卒業試験に自分の体の検査を毎年行うことで技術を確かめているのです。その結果、検査した若手医師が早期癌を発見しました」

そして、手術の執刀医に選ばれたのが、かつての教え子である氏だった。手術は無事に成功。現在は1年に1回、氏のもとへ経鼻内視鏡の検査を受けに来られている。

「指導しているとはいえ、自分の体を使って内視鏡検査を実施させるということは、なかなか出来ることではないでしょうね」

“理想の医師像”については、次のように語られた。

「いかに患者さんの立場に立ち、いかに患者さんの視線で物事が見られるかだと思っています。医師と患者さんはポジションは違いますが、突き詰めれば人間同士のお付き合い、信頼がないと良い関係は築けません。特に患者さんは健康に不安を持って医院を訪れているわけですから、医師は患者さんの立場に立って物事を考える必要があります。口で言うほど簡単なことではありませんが、この一事を日々心がけています」

自分が患者さんの立場になって、初めて気持ち理解出来る——だから、内視鏡検査にしても氏は自分で体験することを重要視している。そして、その姿勢をさらに若い世代の医師たちに伝えているのだ。

「医師からのアドバイスとしては、内視鏡検査は年1回実施するのが望ましいですね。先程の先生のケースでもわかる通り、早期癌ならば全治の可能性は非常に高いのです。実際、1年前には何の異常もなかったのに、1年後に早期胃癌が発見されたという患者さんを何人も見てきています。年齢的には、やはり40代、50代以上の人には年1回の検査を行ってほしいですね」

健康であってこそ 十分な気力も出てくる！

健康は、日々の過ごし方を抜きには語れない。特に、食事と睡眠、運動は重要な項目といえるだろう。

「この3つは、健康を考える上での基本です。大切なのは、すべてバランスだと思います。栄養バランスの良い食事採って、十分睡眠を取って、適度な運動をすること。このバランスを崩した生活を続けると、どこかで体にひずみが生じてしまいますから」

また氏は、「免疫力」という言葉も大切にしている。

「やはり免疫力が高い、もしくは抵抗力が強ければ、病気の予防になります。風邪をひきにくいなどもそれですね。仮に病気になったとしても、元々元気な人、体力がある人ならば治療の効果が早いでしょうし、回復も早いはず。そんな免疫力を高めるためにも、日々のバランスの取れた生活が影響するのです」

氏自身は、どのような健康法を実践しているのだろうか？

「私はスポーツが好きです。大学時代はラグビー部と馬術部に所属していました。現在は野球とラグビーのチームに入っています。野球は『横浜フォートイーズ野球倶楽部』という団体に所属し年間約30試合をこなしています。これは文字通り40歳以上がプレーする団体で、私のチームの最高齢選手は77歳です。ラグビーは関東ラグビーフットボール協会の役員をしています。今でも、しばしば大会に出てプレーしていますよ。ゴルフも大好きでこちらは主に医師仲間とプレーするのですが、忙しくて最近あまり行けていませんね(笑)」

食事に関しては、太り過ぎないように注意しているとか。具体的には油分などを控え、バランスの良い食事、そして食事と運動のバランスに気を配っているようだ。

ところで、氏は実に多趣味である。例えばスポーツならば、他にも1級小型船舶操縦士や射撃・狩猟免許を保持。また日本酒をテイastingする日本酒咽酒師の資格、さらには在家僧侶権僧都職の資格まで持っている。

「特に理由はないのですが、好きだから始めたことばかりです。好きなこと、興味があることならば勉強も楽しいですし、少しでも暇があれば趣味に時間を費やしてしまうことも少なくありません。そういう時間を取ることはストレス解消にもなりますからね。やはり皆さんも自分の楽しみを持ち、心身の疲れを癒す時間を大事にしてほしいと思います」

趣味を楽しむことも、仕事をする 것도、基盤になるものは体力である。

「体力があって、気力も出てきます。つまり、人間にとって健康であることは非常に大切なことなのです。それだけに、自分の体には気を遣ってほしいですね。何度も言うようですが、検査は大切です。検査を嫌がって健康を害しては何にもなりません。その意味でも、内視鏡検査のハードルを下げた経鼻内視鏡の存在は大きいのではないですか」

ひとつひとつの言葉を丁寧な発信していく雨宮明文氏。その姿の随所に、患者さんの健康を守ることに全力を尽くす医師の誠実さを感じた。



BOOK Information

消化器医のための経鼻内視鏡検査入門

2006年9月25日第1版第1刷発行、現在第3刷
A5版全74頁
定価2500円+税
文光堂

監修：西元寺克禮
著：雨宮明文、石井豊太、屋代庫人



これから経鼻内視鏡検査を始める医師・始めた医師への、見やすく読みやすく分かりやすい良き手引書。本検査の特徴や機器・処置具の説明、知識として必要な鼻腔・咽喉・喉頭の構造、鼻腔の前処置・麻酔の方法、検査方法の実際(カラー写真付)、困った時のQ&Aなど検査現場で必要な事項の詳細な説明から向後の課題にも言及。検査中でも読みたい時にすぐ読めるように内視鏡室には是非置いておきたい1冊である。